

未来を考えると、振り返りたくなること： 社会情報学部での18年間を通して

社会情報学部・教授 宮川裕之

定年退職を迎えるにあたり、改めて18年間という時間の重さを考えています。私はもともと未来志向の人間で、過ぎ去った出来事に長く立ち止まるよりも、これからの社会や学びの在り方を考える方が性に合っています。しかし不思議なもので、未来を描こうとすればするほど、過去に潜む“構造”を丁寧に読み解く必要があることに気づかされます。

未来は過去の延長線上に置かれているだけのものではありません。過去の中に眠る「意味」や「問い」——つまり、そこに隠れた目的や価値を掘り起こし、その関係の構図を理解して初めて、未来の選択肢が形づくられていくのだと感じています。

この18年間、社会情報学部は多様な変化を経験してきました。

社会そのものが揺れ動き、テクノロジーが生活と仕事に深く入り込み、情報の流れと価値の形が何度も姿を変えてきました。その最中であって、学部として何を守り、何を変え、どこに向かおうとしたのか——それは、個々の出来事ではなく「変化の構造」として振り返るべき歩みだったと思います。

1. 変化のなかで見えてきた「学部」という場の構造

着任当初、この学部はまだ若く、専門分野も多様で、互いの価値観や方法論が混ざり合う“ゆらぎ”を抱えていました。それは弱点であると同時に、他学部にはない強さでもありました。情報、社会、心理、数理など複数の視点が同じ空間に存在することで、単線的ではない学びが自然と生まれます。これは外の世界に出た学生が最初に驚く点でもあり、実は学部の大きな資源でもありました。

一方、多様性は固有の“ズレ”も生みます。目的と手段のすれ違い、制度と現場のテンポの違い、分野ごとに「同じ言葉でも違う景色が見える」状況などです。こうしたズレは組織の成熟過程では避けられません。しかし、その扱い方によって、前に進むこともあれば、足踏みすることもあります。

振り返ってみると、学部運営とは制度調整にとどまらず、関係をデザインし、異なる立場の意図を丁寧に翻訳し合う作業でした。互いが目指す目的を確認し、情報の流れや判断基準をそろえ、そこから価値をつくり直そうとする姿勢があったからこそ、対話の質が上がり、判断の軸が安定し、学部全体の動きが整っていったのだと思います。

また、組織には“変わりやすい部分”と“ゆっくり変わっていく部分”があることも痛感しました。制度や仕組みといった表層は短いサイクルで調整できますが、価値観や文化のような深い層はすぐには変わりません。それでも日々の対話や小さな行動の積み重ねが、やがてその深層を揺り動かしていきます。こうした“時間の層”を踏まえて関係を整えることが、組織の成長には欠かせないのだと感じています。

——学部を動かしてきたのは、制度ではなく、関係の質でした。

2. 教育の現場で見た「学びの構造」

学生の変化もまた、学部を映す鏡でした。

デジタルネイティブから AI ネイティブへと時代が移る中で、求められる力も変わりました。しかし、

学生が大きく成長する瞬間には、時代に関係なく共通する構造があります。

それは「自分の意図を言語化し、他者との関係の中で検証する」というプロセスです。どれほど情報が多くても、そのつながり方や構造の理解によって判断の質は大きく変わります。

複数の専門領域が同じ場に集まっているからこそ、同じ言葉でも見えている景色が異なります。こうした違いに気づき、互いの意図を確かめ合う過程そのものが、学生にとって深い学びになっていました。

また“情報”と言っても、その中には性質の異なるものが混在します。数字や記録としてのデータ、そこに込められた意図、整理して得られる理解（知識）、そして経験として身につくスキルなどです。この異なる情報を行き来することで、一つの視点だけでは問題を捉えきれないことに気づき、何を問うべきかを改めて考えることになります。その積み重ねが構造の見え方を変え、判断の軸を太くし、“答えを探す”のではなく“問いを深める”姿勢につながっていきました。

この特徴は社会人教育に携わる中で一層鮮明になりました。実務経験を持つ受講生は複雑で曖昧な問題を抱えて学びに来ます。そこには明確な正解がありません。だからこそ、目的を確かめ、関係を描き、情報を整理し、判断の視点をそろえながら価値を再構成する力が不可欠です。そのプロセスに並走する中で、むしろ私自身が大学教育の本質を学ばされることが多くありました。

3. 過去を振り返る意味：出来事ではなく“構造”を探る

18年を振り返って思うのは、出来事そのものよりも、「なぜそうなったのか」という背景の構造にこそ学びが潜んでいるということです。そこを掘り下げてこそ、次の選択肢や未来の描き方が自然と見えてきます。制度改革、カリキュラムの見直し、新しい教育プロジェクトの立ち上げ——いずれも具体的な結論に落ち着いていますが、その背後には意図や制約、期待や不安が複雑に絡み合っていました。目的・情報・判断・価値が絡み合い、その“背景の配置”が結論を形づくっていく過程にこそ、大きな示唆があります。

組織はときに、外側からの大きな構造変化の波にさらされます。

それは戸惑いや摩擦を生む一方で、自らの価値や役割を改めて見つめ直す契機にもなります。社会情報学部も、そうした“揺さぶり”の中で、「私たちは何を大切に、どこに向かうのか」という問いを改めて自分たちの手に取り戻す機会を得たように感じています。

また、教育と研究のバランス、学生の多様性との向き合い、大学という組織の特性、社会からの要請——一見別々に見える課題も、深いところでつながっています。それらを“関係として編み直しながら理解しようとする姿勢”が、私自身の18年間を支えてくれました。

4. これからの学部への“静かなメッセージ”

これからの社会はさらに複雑さを増し、AIを含む情報技術が、あらゆる領域の前提を大きく変えていきます。だからこそ、学部が大切にすべきは、専門知識の強化だけでなく、「多様な要素をつなげ、関係性の中から意味を見いだす姿勢」を育むことだと考えています。

近年、私が特に意識するようになったのは、「個の違いを尊重しながら、全体としてのまとまりをどう保つか」という視点です。かつては経済合理性や制度運用といった構造的制約から、集団としての統一性が優先され、個々の独自性が十分に生かされない場面もありました。しかし今は、デジタル化やAIの普及によって、一人ひとりの状況や意図を捉えつつ全体の調和を図ることがより現実的になっています。

こうした変化は産業構造の動きともつながっています。例えば、大量生産から多品種少量生産へ、そして今や個別の需要に応じた最適化が可能になりつつあるように、教育や知識労働でも個別性を前提に

した再設計が求められる段階に来ています。背景には、社会の成熟とともに、人々の内側にあった「より自分らしく学びたい」という欲求が、ようやく表に出られる環境が整ってきたという面があります。AIやデジタル技術の普及は、こうした本来的な欲求を現実の仕組みとして実装できる段階に到達したことを意味しているのでしょう。

個と全体のどちらかに寄せるのではなく、両方が無理なく機能する関係をどう再構成するのか。その問いに向き合い続けることが、これからの学びの場をつくる重要な視点になると感じています。

学生には知識以上に“問い続ける力”を、教員には専門を越えて対話し、互いの意図を翻訳する姿勢を期待しています。大学という場が単なる知識伝達の機関ではなく、“関係の再構成”を通じて価値を生み出す場であってほしいと願っています。

これまでの18年間を振り返ると、私自身も学生や同僚から多くを教えられてきました。

迷いながら問いを立て続ける学生の姿や、価値観の違いを越えて対話を試みる教員の姿勢に、私は何度も励まされ、背中を押されてきました。

学びの場を形づくってきたのは、制度や設備ではなく、そこに関わった“人”そのものでした。

私自身はひとつの節目を迎えましたが、学びを終えるつもりはありません。むしろこれから、社会がどのように変化し、それをどう読み解き、どんな未来を描けるのか——その挑戦はここからが本番だと感じています。

静かに、しかし確かに、次の学びが始まっています。